

十間計あり、又所によりて半丁、一丁もある所あり、然るに風起り波荒き時は、直に彼絶壁の所へ波打かけて通路なし、右二里半のうちに、一か所長さ五六丁の間、別て路幅狭き所あるを、世に親不知子不知といふ、甚難所にして、親も子を思ふにいとまなしといふ心より、土俗稱し來りたる也、其間絶壁の根に岩穴ありて、十間程づ、置て、其穴いくつも有り、波の打よする時は、通行の人此穴へ走り入て、波の引時を見合て走り過、又波來れば次の穴に入て是を避く、もし北風強き時は、數日を歷るといへども通行ならずとなり、去々年も越後の商人越中に越るとして、此所を無理に通りかゝり、中程にて波風殊に強くなり、併の穴に逃入たるに、穴際まで大浪打かけて走り過べき際なく、八日が間其穴の中に居、やうやく波風靜り、命たすかり、其穴を出たり、其間の饑渴心遣ひ、いふに詞なしと語れり、波高き日無理に通りかゝり、穴中に避隱れて出べき際なく、二日三日穴に居る人は、年々多き事とぞ、余が通行せし時は、雨天にて波風はさのみ強からざりしかども、上の山は傾くがごとく聳え、寄せ来る浪は足を引去れば甚恐しき事今に忘れず、余が友富山の佐伯某此所を通りしには、其身は肩輿に乗り居しが、人足二三十人にて其肩輿を守護し、波の間を走りぬけては穴へ隠れ、走りぬけては穴に隠れて、やうやくに過しと語れり、總じて此邊の人足は、浪を避けて走ることに妙を得たり、されば此地の人夫大勢を召連れ行時は、大抵の浪風には滯ることなしといへり、扱此親不知を過て、少し山のふところに人家ある所を歌村と云、其村を過、又波打際を行けば駒返りと云難所あり、此所は波風なき時といへども、常に山の根へ波打かけ、通路なりがたきゆゑに、絶壁の中半に岩を穿ちて細き道を付、旅人通行す、其間纔の所なれども、馬上なりがたき故に駒返りと名付く、馬は兩方の驛より牽來り、荷物は其纔の所を人夫にて送り越すことなり、歌村より一里半にして青海といふ驛あり、此所は山下を通りぬけて少し廣み也、市振より青海まで四里の所難所なり、風波の時は王侯の勢ひにても越ること成難し、